

Oxford Reading Tree Level 7 More Stories B

- ① The Power Cut 「停電」
- ② The Riddle Stone Part 1 「なぞなぞの石 パート 1」
- ③ The Riddle Stone Part 2 「なぞなぞの石 パート 2」
- ④ A Sea Mystery 「海の不思議」
- ⑤ The Big Breakfast 「たっぷりの朝ごはん」

The Power Cut 「停電」

- PG 1: The family was going on holiday. They were taking Biff and Chip. Mum and Dad were busy packing the car.
“Will you pack these for us, please?” asked Wilma.
一家は休暇に出かけようとしています。ビフとチップも一緒です。お母さん、お父さんはせっせと車に荷物を積んでいます。
「これもみんな積んでくれる？」ウィルマが頼みました。
- PG 2: “There will be lots to do,” said Dad. “You won’t need those.”
“We will,” said Wilf. “We must take the games station. I’ve got a great new game.”
「やることはたくさんあるんだよ」お父さんが言いました。「そんなもの、いらないだろう」
「いるよ」ウィルフが言いました。「ゲーム機は持っていかなきゃ。新しいゲーム、最高なんだから」
- PG 3: “We want to watch these films,” said Wilma. “We haven’t seen some of them yet.”
“And can we take the CD player?” asked Biff.
「映画もみたいわ」ウィルマが言いました。「このうちの何本かはまだ観てないの」
「それからCDプレーヤーも持っていったいい？」ビフがたずねました。
- PG 4: It was a long journey. It took hours. They stopped for a break.
“Let’s get a drink” said Mum.
“Can we play a game in the arcade first?” asked Wilf.
長い道のりでした。何時間もかかりました。途中で休憩をとることにしました。
「何か飲みましょう」お母さんが言いました。
「先にゲームセンターでゲームして来てもいい？」ウィルフがたずねました。

- PG 5: At last they arrived at the cottage.
“We’re in the middle of a forest,” said Wilf.
“We’re in the middle of nowhere,” said Wilma.
ようやく一行は別荘に着きました。
「森のど真ん中に来ちゃったね」ウィルフが言いました。
「何もないところに来ちゃったね」ウィルマが言いました。
- PG 6: They went inside the cottage. Mum and Dad began to unpack the car.
There was a big television in the front room.
“Great!” said Chip. “Let’s watch TV.”
みんなは別荘の中に入りました。お母さん、お父さんは車から荷物を降ろし 始めました。正面の部屋には大きなテレビがありました。
「やった！」チップが言いました。「テレビを観よう」
- PG 7: “We could play some games,” said Wilf. “Could you bring in our games station, Dad?”
“Not now,” said Dad. “Come and help us unpack the car.”
「ゲームしようよ。」ウィルフが言いました。「お父さん、ゲームステーションを持ってきて」
「そんなの後だ。車から荷物を降ろすのを手伝いなさい」
- PG 8: At breakfast Wilma put on a film. Dad sighed. “Get dressed everyone. We didn’t come on holiday to watch TV.”
“Can we watch this first?” asked Wilma.
“Later,” said Dad. “Let’s go out.”
朝食の時間、ウィルマは映画を流していました。お父さんはため息をつきました。「みんな着替えなさい。テレビを観るために休暇にきたんじゃないんだよ」
これを観てからじゃだめ？」ウィルマがたずねました。
「後にしなさい。さあ出かけよう」
- PG 9: “Wasn’t it fun on the beach today?” said Mum.
But nobody said anything. Wilf and Biff were busy playing a game. Chip

and Wilma were listening to a CD.

「今日はビーチに行かない？ 楽しいわよ」お母さんが言いました。
でも誰も返事をしません。ウィルフとビフは夢中でゲームをしています。
チップとウィルマはCDを聞いています。

PG 10: Suddenly all the lights went out. The television and the CD player went off.

“What’s happened?” called Biff.

Dad came in with a torch. “There’s been a power cut!” he said.

すると突然、家中の灯りが消えました。テレビやCDプレーヤーの電源も切れてしまいました。

「どうしちゃったの？」ビフが大声を出しました。

そこへお父さんが懐中電灯を手にとってきました。「停電だ！」

PG 11: Mum found a lamp.

“What if the power doesn’t come back on?” asked Chip, looking at the TV.

“We’ll have to do without it,” said Dad.

“Oh no!” said the children.

お母さんがランプを見つけました。

「電気が戻らなかったらどうなるの？」チップがテレビの方を見ながら言いました。

「電気なしでやっていかなくちゃ」お父さんが言いました。

「えー、そんなあ！」子どもたちが言いました。

PG 12: The power didn’t come back on.

“It may be off for a long time,” said Dad. It was time to eat. They all sat round the table and had supper by candlelight.

電気は復旧しませんでした。

「時間がかかるかもしれないな」お父さんが言いました。食事の時間でした。みんなでテーブルを囲み、ろうそくの灯りで夕食をとりました。

PG 13: It was fun eating in the dark. They took it in turns to tell stories. Dad told them a funny story about a time when he was a little boy. It made them

all laugh.

暗がりの中で食事をとるのは楽しいものでした。一人ずつ順番に話をしていきました。お父さんは、自分が小さかったころのおもしろい話をしてみんなに聞かせました。みんなはそれを聞いて大笑いしました。

- PG 14: That night the power didn't come back on. The children had to use the lamp to go to bed, Chip made a shadow on the wall with his hands. "Guess what it is," he said.

夜になっても電気は復旧しませんでした。子どもたちはランプを使って寝床につかなくてはなりませんでした。チップは手で壁に影絵を作りました。

「これ、な～んだ」チップは言いました。

- PG 15: Wilma shone a torch under her chin. The light made her face look scary. "Whoohh!" she said. "I'm a monster." Everyone laughed. Then Mum came in and said it was time to go to sleep.

ウィルマはあごの下に懐中電灯をあてました。光りに照らされ恐ろしい顔になっています。

「うおー！怪物だぞう」。みんなは、げらげら笑いました。そこへお母さんが入ってきて、もう寝る時間よ、と言いました。

- PG 16: The next morning there was still no power. So the family spent all day on the beach. They played lots of games.

"It's late," said Mum. "It's time to go."

"Can't we stay a bit longer?" asked Wilf.

次の日の朝になっても、電気は復旧しませんでした。そこで一家は一日中ビーチで過ごすことにしました。たくさんゲームをして遊びました。

「もう遅いわ」お母さんが言いました。「帰りましょう」

「もう少しここにいられない？」ウィルフがたずねました。

- PG 17: "I've got an idea," said Dad. "Let's build a fire. We could cook supper." "Brilliant!" they all shouted.

"Let's get some driftwood." Said Mum.

"I'll go and get the food," said Dad.

「こうするのはどうかな」お父さんがいいました。「火を起こそう。ここで夕飯を作るんだ」。「おもしろそう！」みんなが興奮して言いました。
「流木を集めましょう」お母さんが言いました。
「私は食料を取りに行ってくるよ」お父さんが言いました。

PG 18: It was getting dark by the time the fire was finished.
“Hey Wilf! That looks like a giant bird’s nest,” said Mum. “You light it, not lay an egg in it!”

たき火の用意ができるころには、すっかり辺りは暗くなっていました。
「ねえ、ウィルフ！それって巨大な鳥の巣みたいね」お母さんが言いました。
「それは火をつけるものよ。(間違えて)卵を産まないようにね。」

PG 19: Dad cooked lots of food on the fire. Then Mum toasted some marshmallows. They all sat and looked at the stars.

“I have a surprise,” said Dad. “Sparklers!”
お父さんはたき火でたくさんの料理を作りました。それからお母さんはマシュマロを温めました。みんなで座って星を眺めました。
「驚くな」お父さんが言いました。「線香花火だ！」

PG 20: “Sorry,” said Dad the next morning. “Still no power.”

“We can do without it,” smiled Chip.

“Last night was magic,” said Wilf.

“What shall we do tonight?” asked Biff.

「ごめんよ」お父さんが次の日の朝言いました。「まだ電気が使えないんだ」

「何とかなるよ」チップがにっこり笑いました。

「きのうの夜は最高だったね」ウィルフが言いました。

「今夜は何をする？」ビフが言いました。

PG 21: That night Wilma had a good idea.

“We could play hide and seek,” she said. “If you are ‘it’ you have a torch.”

Everyone hid around the dark cottage. Wilf was ‘it’. He counted to a

hundred.

その夜、ウィルマはいいことを思いつきました。

「かくれんぼをしようよ。『鬼』が懐中電灯を持つのに」

みんな真っ暗な家のあちこちに隠れました。ウィルフが「鬼」です。ウィルフは百まで数えました。

PG 22: Wilf looked in every room.

“Found you, Biff!” he called. Biff was hiding behind a big plant.

He found Chip lying in the bath. Wilma was behind the TV. Mum was under a bed.

ウィルフは家中の部屋を見てまわりました。

「見つけたよ、ビフ！」大きな声で言いました。ビフは大きな植物の後ろに隠れていました。

それから浴槽の中で横になっているチップを見つけました。ウィルマはテレビの後ろにいました。お母さんはベッドの下にいました。

PG 23: But where was Dad? Suddenly, the moon came out from behind the clouds. It lit up the windows. Dad was hiding behind the curtains.

“That gives me an idea,” thought Wilma.

ところで、お父さんはどこでしょう？ 突然、雲の陰から月が現れました。

そして窓を照らしました。お父さんはカーテンの後ろに隠れていました。

「（それを見て）そうだ、いい考えがある」ウィルマは考えました。

PG 24: The next day Biff, Chip and Wilf went with Wilma to the woods.

“Why have we brought the boxes and a sheet?” asked Chip.

“And why are we here so early?” yawned Wilf.

次の日、ビフ、チップ、ウィルフはウィルマと一緒に森へ行きました。

「どうして箱とシーツを持って来たの？」チップがたずねました。

「どうしてこんな朝早くにこんな所に来たの？」ウィルフがあくびをしました。

PG 25: “There’s loads to do before tonight.” Wilma’s eyes sparkled. “This evening, we are going to do a shadow play!”

“Brilliant!” said Chip. “What’s that?”

「夜までにやらなくちゃいけないことがあるの」ウィルマは目をきらきらさ

せて言いました。「今夜私たちは影絵でお芝居をやるのよ！」
「おもしろそう！」チップが言いました。「でも何それ」

- PG 26: The children worked all day. They cut out shapes from the cardboard boxes. Wilf tied the sheet between two trees.
“What are you doing?” Dad asked.
“It’s a surprise,” said Wilma.
子どもたちは一日かかって準備しました。ダンボール箱を色んな形に切り抜きました。ウィルフは二つの木の間にシーツを結びつけました。
「何をしてるんだい？」お父さんがたずねました。
「後のお楽しみよ」ウィルマが言いました。
- PG 27: There was a golden sunset that evening. The children had put down lots of candles in jars.
“How beautiful!” said Mum.
“It’s like magic!” gasped Dad.
その日の夕焼けは金色に輝いていました。子どもたちはびんに入れたろうそくを足元にたくさん並べました。
「なんてきれいなもの！」お母さんが言いました。
「まるで夢みたいだ！」お父さんは息をのみました。
- PG 28: Suddenly Biff turned up the lamp. The sheet glowed. The play began. It was about elves. The elves were cardboard puppets. Wilf and Chip moved the puppets around.
突然ビフがランプをともしました。するとシーツが白く浮かび上がりました。お芝居の始まりです。それはエルフ(妖精)たちのお話でした。エルフの人形はダンボールで作ったものです。ウィルフとチップが人形を動かしました。
- PG 29: Biff did the elves’ voices. Wilma played the guitar. They all sang songs. It was a good story. It was funny and sad. It made Mum laugh and Dad cry. ビフが小人たちのセリフを言いました。ウィルマがギターを弾きました。そしてみんなで歌を歌いました。とてもいいお話でした。笑いあり涙ありのお話でした。そのお話にお母さんは声をたてて笑い、お父さんは涙を

流しました。

PG 30: The play had finished. Everyone bowed.

“Hooray!” shouted Mum. “Well done!”

“Now,” said Dad. “I’ve got a surprise.”

“What is it?” asked Wilma.

“You’ll see,” smiled Dad.

お芝居が終わりました。子どもたちはおじぎしました。

「やったわね！」お母さんが大声で言いました。「すばらしかったわ！」

「さあ」お父さんが言いました。「わたしからもびっくりがあるぞ」

「なあに？」ウィルマがたずねました。

「すぐわかるさ(You’ll see)」お父さんはにっこり笑いました。

PG 31 They went back to the cottage. It was pitch black.

“We can’t see anything,” said Wilf.

“I said ‘you’ll see’ and now you can,” said Dad. He turned on the power.

みんなは別荘に戻りました。中は真っ暗です。

「何も見えないよ」ウィルフが言いました。

「言っただろ、『すぐ見えるさ(you’ll see)』って。ほら、ごらん」お父さんが言いました。そして電気をつけました。

PG 32 Dad laughed. “Surprise!” he said.

“I wanted you to enjoy the holiday without TV. There was no power cut.”

“Turn it off again,” said the children. “We can do without it.”

お父さんは笑いました。そして、「びっくりしたかい！」と言いました。

「君たちにはテレビなしで休日を楽しんでもらいたかったんだ。停電なんて本当はなかったのさ」

「もう一度電気を消して」子どもたちは言いました。

「電気がなくても何とかなるよ」

The Riddle Stone *Part 1* 「なぞなぞの石 パート 1」

- PG 1: Dad had pulled up some floorboards.
“Hello!” he said. “What’s this?”
Under the floor was a stone. It had some strange writing on it.
お父さんが床板を何枚かはがしました。
「おや！」お父さんが言いました。「何だこれ？」
床の下から一枚の石が出てきました。そこには見慣れぬ文字で何か書いてあります。
- PG 2: Dad was going to throw the stone away, but Chip wanted to keep it.
“Look at this,” he said to Biff. “Do you think the writing is Chinese?”
“I don’t know,” said Biff.
お父さんはそれを捨てようとしてました。でもチップはそれを取っておきたいと思いました。
「これを見て」チップはビフに言いました。「この文字、中国語かなあ？」
「わからないわ」ビフは言いました。
- PG 3: Chip took the stone to school. He showed it to a boy called Hong.
“It is written in Chinese,” said Hong. “I can’t read it, but my grandfather can.”
チップはその石を学校に持っていきました。そしてホンという少年に見せました。
「書かれているのは中国語だよ」ホンは言いました。「ぼくには読めないけど、ぼくのおじいちゃんだったら読めるよ」
- PG 4: Hong’s grandfather always came after school to take Hong home.
Chip showed him the stone.
“Yes, it is Chinese,” said Hong’s grandfather. “It says, ‘Do you mind?’”
ホンのおじいさんは放課後いつもホンを迎えに来ます。
チップはその石をおじいさんに見せました。
「そうだ、中国語だ」ホンのおじいさんは言いました。「『いやですか(気

にしますか)？』と書いてある」

- PG 5: “What a strange question,” said Biff.
“It may be a riddle,” said Hong’s grandfather. “See! The stone is broken. Maybe the answer is on the other half.”
「変な質問だわ」ビフは言いました。
「なぞなぞかもしれないぞ」ホンのおじいさんは言いました。
「見てごらん！石は割れている。答えはこの片割れにあるのかもしれない」
- PG 6: Chip gave Hong the stone to keep. He put it in his bag.
“May Hong come round to play with us?” asked Biff.
“All right,” said Hong’s grandfather.
チップはホンにその石を預けました。ホンは石をかばんにしまいました。
「ホンにうちに遊びにきてもらってもいい？」ビフはたずねました。
「いいとも」ホンのおじいさんは言いました。
- PG 7: They went to play in Biff’s room.
“What is a riddle?” asked Chip.
“It’s a puzzle in words,” said Hong.
みんなはビフの部屋に遊びに行きました。
「なぞなぞって何？」チップがたずねました。
「言葉のパズルだよ」ホンが言いました。
- PG 8: “Here is a good riddle,” said Hong. “How do you spell ‘Hungry horse’ using only four letters?”
“We don’t know,” said Biff.
「いいなぞなぞがあるよ」ホンが言いました。「『おなかのすいた馬』をたった4文字であらわすにはどうしたらいいでしょう？」
「わからないわ」ビフが言いました。
- PG 9: “It’s easy,” laughed Hong. “MTGG. Here’s another riddle. What is this? The more it dries the more it gets wet.”
Suddenly, the magic key began to glow.

「簡単だよ」ホンは笑いました。「*MTGG だ。もうひとつ、別のなぞなぞ。乾けば乾くほどぬれるものって、なんだ？」

突然、マジックキーが白く光りはじめました。

(*編集部注:MTGG の MT は発音が近い empty と、GG はイギリス英語で馬の愛称を指す gee-gee とかけている。「MTGG」=「empty gee-gee」で、「からっぽ/腹ペコの馬」の意となる)

- PG 10: The magic took them to a rocky valley.
Four paths met. There was a signpost pointing four ways. Each way pointed to Riddle Mountain
魔法の力が 3 人を岩の多い谷間に連れて行きました。
4 本の小さな道が交わっています。4 つの方向を指し示す道しるべが立っています。どの道も『なぞなぞ山』を指しています。
- PG 11: A boy was sitting on a rock. “My name is Ty,” he said. “I want to go to Riddle Mountain, but I don’t know which path to take. I can’t think of the answer to this riddle.”
一人の少年が岩に腰かけていました。
「ぼくの名前はタイ」少年は言いました。『なぞなぞ山』に行きたいんだけど、どの道を行けばいいのかわからないんだ。このなぞなぞの答えがわからなくて」
- PG 12: The riddle was on a tall post. It said, “It’s only one colour, but it can grow. Sticks to your feet, wherever you go. There in the sun, not in the rain. Never does harm, never feels pain.”
なぞなぞは高い柱の上に書かれていました。そこにはこうあります。「色は一色しかないが、大きくなる。どこに行くにも足もとから離れない。晴れの日にはあるが、雨の日にはない。決して人を傷つけることはなく、それ自体が痛い思いをすることもない」
- PG 13: “The answer is a shadow,” said Hong. “Look at the shadow of the post. It points up that path. That must be the way,”
“Are you sure?” asked Biff.
“Yes, it’s a riddle,” said Ty. “Let’s go!”

「答えは影だ」ホンが言いました。「柱の影を見て。あの道をさしてよ。あっちの方向に違いない」
「本当に？」ビフはたずねました。
「そうさ、なぞなぞだもの」タイは言いました。「さあ、行こう！」

PG 14: “It is hard to get to Riddle Mountain,” said Ty. “It will be dangerous. I may never get there.”

“Then why do you have to go?” asked Biff.

「『なぞなぞ山』まで行くのは大変なことなんだ」タイが言いました。「危険な目にあうことだろう。決してたどり着くことはできないかもしれない」
「それならなぜ行かなくちゃならないの？」ビフがたずねました。

PG 15: “I want to be the Riddle Maker,” said Ty. “I have to get to Riddle Mountain. I have to answer *all* the riddles on the way. The last riddle is the hardest. No one has ever found the answer.”

「ぼくは『なぞなぞ出題者』になりたいんだ」タイは言いました。「そのためには『なぞなぞ山』まで行かなくちゃならない。道の途中で出される全てのなぞなぞに答えなくちゃならない。最後のなぞなぞは一番難しいんだ。今まで誰も答えがわかった者はいないんだ」

PG 16: Suddenly, a huge giant stood in the way.

“I hope he’s friendly,” said Chip.

“Answer this riddle and you can pass by,” roared the giant.

突然、それはそれは大きな巨人が行く手に立ちはだかりました。

「気さくな人だったらいいんだけど」チップが言いました。

「このなぞなぞに答えられれば、ここを通してやる」大男はうなるような声で言いました。

PG 17: “Write down how much I weigh,” he said.

“But he must weigh tonnes!” said Biff.

“No, it’s a riddle,” said Hong. “I can do it.” He wrote down the answer.

「俺様の体重を書け！」巨人は言いました。

「何トンもあるに違いないわ」ビフが言いました。

「いや、これはなぞなぞだよ」ホンは言いました。「わかった」ホンが答え

を書きました。

- PG 18: “Good luck in the Land of Riddles,” said the giant.
“What did you write down?” asked Chip.
“I wrote the words ‘how much I weigh,’” said Hong.
「なぞなぞの国で、健闘を祈る」巨人は言いました。
「なんて書いたの？」チップはたずねました。
「『俺様の体重』って書いたのさ」ホンが言いました。
- PG 19: It was not far to the top of the hill. Suddenly, a dragon stood in the way.
“I hope he’s friendly,” said Hong.
“Look!” said Biff. “There are bubbles coming out of his mouth!”
丘の頂上まであと少しの所まで来ました。突然、一頭の竜が行く手に立ちはだかりました。
「気さくな竜だったらいいんだけど」ホンが言いました。
「見て！」ビフが言いました。「口から泡が出ているわ！」
- PG 20: The dragon spoke.
“Over there is Riddle Mountain,” it said. “You have a long way to go.”
“Help!” said Ty. “The journey looks dangerous.”
竜は言葉をしゃべりました。
「あそこに見えるのが『なぞなぞ山』だ」そう言いました。「長い道のりだぞ」
「助けてください！」タイは言いました。「旅路は危険が多そうです」
- PG 21: Below was a black lake. Across the lake, the land was dry and rocky. Beyond, there was a deep river and dark forest. Far away was a tall, grey mountain.
眼下には黒い湖が広がっていました。湖の向こう側は、乾いた岩地になっています。その先には深い川と暗い森があります。はるか遠くに高い灰色の山が見えました。

- PG 22: Huge bubbles came out of the dragon's jaws.
"Answer this riddle," it said. "How many sides does a bubble have?"
"That's easy," said Hong. "It has two."
巨大な泡が竜の口から出ています。
「このなぞなぞに答えろ」竜は言いました。「泡にはいくつの面がある？」
「簡単だ」ホンが言いました。「二つ」
- PG 23: "The inside and the outside," he said.
"Good," said the dragon. "Now step inside this bubble."
Hong stepped into the bubble. It began to float away.
「内側と外側だ」ホンは言いました。
「正解だ」竜が言いました。「さあこの泡の中に足を踏み入れて」
ホンは泡の中に踏み込みました。すると泡はゆらゆらと動き出しました。
- PG 24: "Step into a bubble," yelled Hong.
They all stepped inside the bubbles and floated up and up.
"This is scary," said Biff. "What if the bubbles pop?"
「泡に入って」ホンが大声で言いました。
みんなは泡の中に入り、上へ上へと浮かび上がりました。
「怖いわ」ビフが言いました。「もし泡がはじけたら？」
- PG 25: They floated on and on. At last, they began to float down to the black lake.
"I hope the bubbles don't pop here," yelled Chip.
子どもたちはずっと漂っていました。とうとう黒い湖に向かって落ち始めました。
「ここで泡がはじけませんように」チップは叫びました。
- PG 26: Then the bubbles popped and the children fell into the lake. Suddenly, a huge serpent rose out of the water. "I don't like this adventure," said Biff.
その時泡がはじけ、子どもたちは湖に落ちました。
突然、それはそれは大きな蛇が水の中から現れました。
「こんな冒険まっぴらだわ」ビフがいました。

- PG 27: “What is this?” said the serpent, “the more it dries, the more it gets wet?”
“It’s easy,” said Hong. “It’s a towel.”
“Good,” said the serpent. “now climb on my back.”
「問題だ」蛇が言いました。「乾けば乾くほど濡れるものってなあに？」
「簡単だ」ホンが言いました。「タオル」
「正解」蛇は言いました。「さあ私の背中に乗って」
- PG 28: The serpent swam across the lake.
“How do you know the answer to all these riddles, Hong?” asked Ty.
“I don’t know,” said Hong. “They just come to me.”
蛇は湖を泳いで渡りました。
「ホン、君はなぜなぜの答えがどうして全部わかるの？」
「わからないよ」ホンが言いました。「ただひらめくんだ」
- PG 29: Goblins were waiting for the children. They pulled and pinched them.
“Ouch! That hurts,” said Chip.
“Ha! You won’t answer the next riddle,” said one of the goblins.
ゴブリン(小鬼)たちが待ちかまえていました。そして、子どもたちを引っ
ぱったりつねったりしました。
「いたっ！痛いなあ」チップが言いました。
「はあ！次のなぜなぜには答えられないだろう」ゴブリンの一人が言
いました。
- PG 30: The goblins put the children in a cage. One of the goblins stole the magic
key. “Oh no!” said Biff. “Now we can’t get back from this adventure.”
ゴブリンは子どもたちをおりのの中に入れました。ゴブリンの一匹がマジッ
クキーを盗りました。
「ああ、どうしよう！」ビフが言いました。「もうこの冒険から帰れないわ」
- PG 31: The Goblin King spoke to them.
“Answer this,” he said. “How do you want to die?”
“We don’t want to die,” said Chip.
ゴブリンの王は子どもたちに話しかけました。

「答えるんだ」そう言いました。「おまえたち、どうやって死にたい？」
「ぼくらは死にたくなんでないよ」チップが言いました。

PG 32: Hong began to laugh.

“It’s not funny,” said Biff. “We don’t want to die.”

“It’s a riddle,” said Hong. “Don’t worry. I know the answer.”

ホンが笑い出しました。

「おかしくなんてないわ」ビフが言いました。「私たち、死にたくないもの」

「これはなぞなぞだよ」ホンが言いました。「心配しないで。答えはわか
ってる」

Now read Part 2...
この続きはパート2をお読みください

The Riddle Stone *Part 2* 「なぞなぞの石 パート2」

PG 1: **Have you read part 1?**
パート1はもう読みましたか？

The Goblin King looked at the children. His small eyes glinted and he snapped his long, thin fingers.

“How do you want to die?” he asked.

ゴブリンの王は子どもたちを見ました。小さな目をぎらぎら光らせながら、長くて細い指をパチンと鳴らしました。

「おまえたち、どうやって死にたい？」王はたずねました。

PG 2: “We want to die of old age,” said Hong.

“Grrr! That is the right answer,” said the Goblin King. “So I must let you go.” He opened the door of the cage.

「年をとって死にたい」ホンはそう言いました。

「ぐうう！正解だ」ゴブリンの王は言いました。「お前らを出してやらなきゃならないな」

王はおりのドアを開けました。

PG 3: “Brilliant!” said Chip. “But how did you know the right answer?”

“I don’t know,” said Hong. “I just did.”

“Let’s find the next riddle,” said Ty.

「すごい！」チップが言いました。「でもどうして正解がわかったの？」

「わからないよ」ホンが言いました。「ただひらめいたのさ」

「次のなぞなぞを見つけよう」タイが言いました。

PG 4: “The goblins still have the magic key,” said Biff. “We must get it back.”

“Give us back our key,” said Chip.

“No,” said a goblin. “We won’t.”

「ゴブリンたちはまだマジックキーを持ったままだわ」ビフは言いました。

「取り返さなくちゃ」

「鍵を返して」チップは言いました。

「いやだね」ゴブリンは言いました。「返すもんか」

PG 5: “Give it back!” shouted Chip. “Make us!” called the Goblins. Hong had an idea. He spoke to the Goblin King.

「返してよ！」チップが叫びました。

「そうさせてごらん！」ゴブリンたちが叫びました。

ホンには考えがありました。ゴブリンの王に言いました。

PG 6: “We will ask you a riddle,” Hong said. “You must give us back the key if you can’t answer it.” “All right,” said the Goblin King. “What is the riddle?”

「今度はぼくたちがなぞなぞを出すよ」ホンは言いました。「答えられなかったら鍵を返してもらおうよ」

「いいだろう」ゴブリンの王は言いました。「どんななぞなぞだ？」

PG 7: Hong wrote in the sand,

$1 + 1 = 6$.

“Make this work by drawing a straight line,” he said.

The goblins scratched their heads. At last they said. “We can’t do it.”

ホンは砂にこう書きました。

$1 + 1 = 6$

「一本線を書き足して、この計算を完成させてみて」ホンは言いました。

ゴブリンたちは頭をかきむしりました。そしてついこう言いました。「お

手上げだ」

PG 8: Hong put a line on the ‘plus’.

“One, and one, and four add up to six!” said Hong

“Very clever,” said the Goblin King and he gave Biff the key.

ホンは「たす」の記号に一本線を足しました。

「1と1、それに4を足すと6！」ホンは言いました。

「なんと賢い」ゴブリンの王はそう言って、ビフに鍵を返してくれました。

PG 9: The children went on. At last, they came to a flat desert.

There were strange shapes in the sky.

Suddenly, the shapes flew down and whizzed over the children's heads.
子どもたちは先へ進みました。ようやく平坦な砂漠までやって着きました。
空には奇妙な形のものが飛んでいます。
突然、その形が降りてきて、子どもたちの頭の上をピューッとかすめました。

- PG 10: "Ouch! That one hit me," said Ty.
The flying shapes were kites. The kites dived at the children.
"What is the answer to this riddle?" shouted the kite flier.
「痛い！当たったぞ」タイが言いました。
飛行物体の正体は凧でした。凧は子どもたちめがけて急降下してきます。
「このなぞなぞの答えはなんだ？」
凧使いが叫びました。
- PG 11: "I can be *cracked, I can be played, I can be told, I can be made. What am I?" "I know this one," said Hong. "The answer is a joke."
「人は私を crack したり、遊んだり、言ったり、創ったりする。さあ、私はだれ？」
「わかった」ホンが言いました。「答えは冗談(悪ふざけ)だ」
(*編集部注: crack には「割る」と「冗談を言う」の二重の意味がある)
- PG 12: The kite flier let them pass, but next they came to a wide river.
"We can never cross this," said Chip. "It's too deep and dangerous."
Then they saw an old man on a raft.
凧使いは子どもたちを通らせました。しかしその先には大きな川がありました。
「こんな川、絶対渡れないよ」チップが言いました。
「とっても深いし危険すぎる」
すると、いかだに乗った老人が現れました。
- PG 13: "I will take you across," said the old man. "But first answer this riddle. I have seven children. Half of them are boys. How can this be?"
「お前らを渡らせてやろう」老人は言いました。「だが、まずこのなぞなぞ

に答えるのだ。私には7人の子どもがいて、その半分は男の子だ。これはどういうことかな？」

- PG 14: “I know the answer,” said Hong. “All your children are boys.”
“That is right,” said the old man. “I will take you across the river.”
「わかった」ホンは言いました。「子どもは全員男の子だ」
「正解だ」老人は言いました。「お前らを川の向こうに連れて行ってやろう」
- PG 15: “How do you know the answer to all the riddles,” Ty asked Hong.
“I don’t know,” said Hong. “The answers just come to me.”
「なぜなぜの答えがどうして全部わかるの？」タイはホンにたずねました。
「わからないよ」ホンは言いました。「ただ答えがうかぶんだ」
- PG 16: The children came to a dark, gloomy forest. The trees were bent and twisted. “What a scary place,” said Biff. “I can see eyes looking at us.”
子どもたちは暗くて陰気な森までやってきました。木々は曲がったりねじれたりしています。
「なんて気味の悪い所なの」ビフが言いました。「いくつもの目が私たちを見ているわ」
- PG 17: Suddenly, wolves sprang out of the trees. They had red eyes and long, sharp, white teeth.
“They’re after us,” yelled Chip. “Run!”
突然、狼たちが木の間から姿を現しました。狼たちの目は赤く、長くてとがった白い歯をしています。
「ぼくたち、ねらわれてるよ」チップが叫びました。「走れ！」
- PG 18: The children ran fast, but the wolves were faster.
“Quick!” yelled Biff. “Climb a tree.”
The children climbed quickly, but Hong was a bit slow. A wolf sprang up at him.
子どもたちは一目散に走りました。でも狼たちの方が足は早かったので

す。

「早く！」ビフが叫びました。「木に登るのよ」

子どもたちは大急ぎで登りました。ところがホンは少し遅れてしまいました。一匹の狼がホンに飛びつきました。

PG 19: The wolf snapped at Hong. It sank its teeth into his bag and pulled it off his back.

“Help!” yelled Hong.

狼はホンにかみつこうとしました。ホンのかばんにがぶりと食いつき、背中からかばんを引きはがしました。

「助けて！」ホンは叫びました。

PG 20: Then a strange woman came out of the trees. The wolves ran up to her. The Wolf Woman told the wolves to sit. She told the children to climb down.

すると奇妙な女が木の間から出てきました。狼たちは女にかけよりました。狼女は狼たちに座るように言いました。そして子どもたちに降りてくるよう、言いました。

PG 21: The Wolf Woman picked up Hong’s bag, but she gave it to Ty. “Answer this riddle,” she said. “*It lives half its life. It dies half its life. It dances to no music. It drinks with no mouth.”

狼女はホンのかばんを拾ってくれました。しかしそのかばんをタイに渡しました。

「このなぞなぞに答えなさい」狼女は言いました。「半分は生きていて、半分は死んでいる。音楽なしで踊る。口がないのに飲み物を飲む」

PG 22: This time, Ty knew the answer. “That’s easy,” he said. “It’s a tree.” “Good,” said the Wolf Woman. “The next riddle is at Riddle Mountain. No one has ever got it right.

今度はタイが答えをわかりました。「簡単だ」タイは言いました。「それは木だね！」

「正解よ」狼女が言いました。「次のなぞなぞは、『なぞなぞ山』で出題されるわ。今までに答えられた者はいないのよ」

- PG 23: The children went on. Then Biff said, "Hong has known the answers to all the riddles, but not the last one. Why?"
"I don't know," said Hong.
"It's strange," said Biff.
子どもたちは先に進みました。それからビフが言いました。
「ホンはなぜなぜの答えを何でも知っていたわ。でもさっきのはわからなかった。どうして？」
「わからないよ」ホンが言いました。
「おかしいわね」ビフが言いました。
- PG 24: By now they were at Riddle Mountain. At the top was a cave.
"The last riddle will be up there," said Ty. "Come on!"
ついに子どもたちは『なぜなぜ山』までやって来ました。頂上には洞穴があります。
「最後のなぜなぜはあそこにあるんだろう」タイが言いました。「行こう！」
- PG 25: They climbed up to the cave.
"What a climb!" said Chip. "I'm tired."
"Let's have a rest," said Ty.
The children sat down. Ty took off Hong's bag.
子どもたちは洞穴まで登りました。
「すごい坂だったなあ」チップが言いました。「疲れたよ」
「ちょっと休もう」タイが言いました。
子どもたちは座りました。タイはホンのかばんを降ろしました。
- PG 26: Suddenly, the ground began to shake. A stone stature rose up out of the earth. The statue opened its hand and spoke.
"Who answers this riddle, will be the Riddle Maker!" it said.
突然、地面が揺れ始めました。石像が地面の中から現れました。石像は手を開いて言いました。
「このなぜなぜを答えるものが、『なぜなぜ出題者』になれるのだ！」石

像は言いました。

PG 27: “This is the riddle,” said the stature. “If the answer I give is ‘yes’, but what I mean is ‘no’, then what is the question?”

Everyone looked at Hong.

「問題を言う」石像は言いました。「ある質問に対して“Yes”と答えると実際は“No”の意味になる。その質問とは？」

みんなはホンの方を見ました。

PG 28: “I don’t know the answer,” said Hong.

“Neither do I,” said Ty sadly.

“We’ve failed,” said Biff.

“Wait!” said Chip. “I have an idea!”

「ぼく、答えがわからないよ」ホンが言いました。

「ぼくもだ」タイが悲しそうに言いました。

「これでおしまいね」ビフは言いました。

「待って！」チップが言いました。「考えがある」

PG 29: “Where is that stone with the Chinese writing?” he asked.

“It’s in my bag,” said Hong.

“Ty knew the Wolf Woman’s riddle and he had Hong’s bag,” said Biff.

「中国語が書いてある石はどこ？」チップはたずねました。

「ぼくのかばんの中だ」ホンが言いました。

「タイが狼女のなぞなぞに答えた時、ホンのバッグを持っていたね」ビフは言いました。

PG 30: “Maybe whoever has the stone can answer riddles,” said Chip.

Ty took the stone out of the bag.

“I know the answer to the question,” he said. “It is ‘Do you mind?’”

「あの石を持っていれば、誰でもなぞなぞに答えられるのかもしれない」

タイはかばんから石を取り出しました。

「問題の答えがわかったぞ」タイは言いました。「『いやですか？』」だ。

- PG 31: Ty put the stone in the statue's hand.
"It is the right answer," said the statue. "You are the new Riddle Maker."
Just then the magic key began to glow. The adventure was over.
タイはその石を石像の手の中に置きました。
「正解だ」石像は言いました。「君が新しい『なぞなぞ出題者』だ」
ちょうどその時、マジックキーが白く光り始めました。冒険は終わったのです。
- PG 32: "So we knew the answer all along," said Chip. "It was on the stone."
"Well, I didn't want to be the Riddle Maker," said Hong. "Did you?"
"No," said Biff. "And I never want to hear another riddle."
「最初から答えはわかっていたよね」チップが言いました。「石に書いてあったんだもの」
「うん、でもぼくは『なぞなぞ出題者』にはなりたくなかったんだ」ホンは言いました。
「君たちは？」
「私たちもよ」ビフが言いました。「もう二度となぞなぞなんて聞きたくないわ」

A Sea Mystery 「海の不思議」

- PG 1: “It’s the last day of the holiday,” said Kipper. “I’ve seen something I want to buy before we go home.”
「今日で休みは終わりだね」キッパーが言いました。「うちに帰る前に買いたいものがあるんだ」
- PG 2: Kipper took Biff and Chip to an old shop. Inside, it looked dark and dusty. In the window was a model of a fishing boat.
“I want to buy that boat,” said Kipper.
キッパーはビフとチップを一軒の古いお店に連れて行きました。中は薄暗く、ほこりをかぶっているように見えます。窓の中に釣り船の模型がありました。
「あの船を買いたいな」キッパーは言いました。
- PG 3: The shop was full of things for boats. An old man sat in the corner.
“Excuse me,” said Chip. “We’d like to buy the model boat. How much is it?”
店の中は、船に関するものでいっぱいでした。一人のおじいさんが店の隅に座っています。
「すみません」チップは言いました。「あの模型の船を下さい。おいくらですか？」
- PG 4: “It’s not for sale,” said the old man. “The boat is a model of my great grandfather’s fishing boat. It was made after he was lost at sea.”
“What happened to him?” asked Biff.
「売り物じゃないよ」おじいさんは言いました。「あの船はわしのひいじいさんの釣り船の模型でな。彼が海でいなくなった後に作られたものだ」
「何があったんですか？」ビフはたずねました。
- PG 5: “No one knows,” said the old man. “One day he went to sea in his boat

and he never came back.”

The old man began to cough.

“Now go away. I want to shut the shop,” he said.

「だれも知らんのだ」おじいさんは言いました。「ある日、自分の船で海に出て行ったきり、戻らんかった」

おじいさんは咳をしはじめました。

「さあ、もう行ってくれ。店を閉めたいんでね」おじいさんは言いました。

PG 6: Kipper was upset. “He wasn’t a very nice man,” he said. “Never mind, Kipper,” said Mum. “I’ll buy you an ice lolly to cheer you up.”

キッパーはがっかりしました。「あのおじいさん、あんまり感じよくなかったな」キッパーは言いました。

「気にしないで、キッパー」お母さんが言いました。「アイスクャンディーを買ってあげるわ。だから元気を出して」

PG 7: The children sat on the sea wall eating their lollies. Suddenly, they heard a cough. It was the old man. He was holding a little model rowing boat. “What do you want?” asked Biff nervously.

子どもたちは防潮堤に座ってアイスを食べていました。突然、咳が聞こえました。あのおじいさんでした。小さな模型の手漕ぎボートを手にしています。

「何かご用ですか？」ビフはいらいらして言いました。

PG 8: “I am sorry I was rude,” said the old man. “I’ve bought you a present.” He gave Kipper the little boat.

“It’s from the model you liked,” he said.

「さっきは失礼した。すまなかったね」おじいさんは言いました。「君にプレゼントを持ってきたんだ」おじいさんはキッパーに小さなボートをくれました。

「これは君がほしがっていた模型の船の一部だよ」

PG 9: The little boat was made of wood. It looked very real. It even had a little pair of oars.

“Oh, thank you,” Said Kipper. He looked up, but the old man had gone.

小さなボートは木できていました。本物そっくりでした。小さな一組のオールまでついています。

「わあ、ありがとう」キッパーは言いました。キッパーが見上げると、そこにはもうおじいさんはいませんでした。

PG 10: “It’s time to go home I’m afraid,” said Dad.

“Did you see where the old man went?” asked Chip.

“What old man?” asked Dad.

「さあ、家に帰る時間だよ」お父さんが言いました。

「おじいさんがどこに行ったか、知ってる？」チップがたずねました。

「おじいさんって？」お父さんがたずね返しました。

PG 11: When they got home, the children went to Biff’s room. They wanted to play with the model boat.

“Oh!” said Chip. “I’ve broken off an oar!” Just then the key began to glow.

家につくと、子どもたちはビフの部屋へ行きました。模型のボートで遊びたかったのです。

「ああ！」チップは言いました。「オールが一本とれちゃった！」ちょうどその時、鍵が白く光り始めました。

PG 12: The children landed in water. The magic had taken them out to sea.

“Where are we?” yelled Biff. “I’m scared!” said Kipper.

“I’m not a very good swimmer.

子どもたちは水の中に落ちました。魔法の力が三人を海に連れてきたのです。

「ここ、どこ？」ビフが悲鳴をあげました。

「怖いよお！」キッパーが言いました。「ぼく、泳ぎはあまり得意じゃないんだ」

PG 13: Suddenly, the oar splashed into the sea next to them.

“Hold on to the oar!” said Biff. “It will keep us afloat.”

突然、一本のオールがザブンと海に落ちてきました。子どもたちのすぐ横にです。

「オールにしっかりつかまって！」ビフが言いました。「そうすれば浮かんでいられるから」

- PG 14: The children held on to the oar. They floated for a long time.
“There’s nothing but sea,” said Biff.
“I don’t like this adventure,” said Chip.
子どもたちはオールにしがみつきました。そして長い時間浮かんでいました。
「見渡す限り海ね」ビフは言いました。
「こんな冒険、まっぴらだ」チップは言いました。
- PG 15: It began to get foggy. Then they saw a strange shape through the fog. It was getting bigger and bigger.
“Now I’m scared!” said Biff.
霧が濃くなってきました。すると霧の向こうに不思議な形が見えました。それはどんどん大きくなっていきます。
「私も怖くなってきたわ！」ビフは言いました。
- PG 16: A sailing boat came out of the fog. It drifted towards the children.
“Over here!” shouted Chip.
“Help!” yelled Kipper.
“I can’t see anyone,” said Biff.
一隻の帆船が霧の中から現れました。子どもたちの方へゆっくり近づいてきます。
「こっちだ！」チップは叫びました。
「助けて！」キッパーは大声を出しました。
「誰も見えないわ」ビフが言いました。
- PG 17: As the boat got near, Chip saw a rope hanging into the water.
“Tie the rope to the oar, then we can climb on board,” said Chip.
船が近くまで来ると、チップはロープが水の中にたれさがっていることに気づきました。
「オールにロープを結びつけるんだ。それから船によじのぼろう」チップは言いました。

- PG 18: They climbed up on to the boat.
“Phew!” said Kipper. “That was scary.”
“Let’s find the crew,” said Biff. “They can tell us where we are.”
子どもたちは船によじのぼりました。
「ふう！」キッパーは言いました。「怖かったなあ」
「乗組員をさがそう」ビフは言いました。「ここがどこなのか、教えてもらいましょう」
- PG 19: They looked around. On deck there were nets and baskets of fish. There was an open hatch leading down into the boat.
“Maybe they are down below,” said Chip.
子どもたちは辺りを見回しました。甲板の上には魚用の網やかごが置いてあります。昇降口が開いていて、船の中に降りられるようになっていました。
「乗組員は下にいるかもしれない」チップは言いました。
- PG 20: The children went down into a large cabin. It was lit by lamps. There was a big table in the middle of the cabin. The table was set for dinner.
子どもたちは大きな船室に降りていきました。ランプが灯っています。部屋の中央に大きなテーブルがあります。テーブルには夕食の準備が整っていました。
- PG 21: In the corner, a big pot of stew was bubbling away on a stove. On the table there were five mugs of hot tea.
“This is strange,” said Biff. “There’s nobody on board.”
部屋の隅にはシチューの入った大きななべがあり、ストーブの上でぐつぐつ煮立っています。テーブルの上には熱い紅茶の入ったマグカップが五つありました。
「変だわ」ビフが言いました。「誰もこの船には乗ってない」
- PG 22: “There has to be,” said Chip. “Why would the food be hot?”

“And who lit the lamps?” asked Kipper.

Suddenly, there was a loud crash above them. The boat shook.

「誰かいるはずだよ」チップは言いました。「でなかったら、食べ物が温かいわけがない」

「それにランプは誰がつけたのさ？」キッパーがたずねました。

突然、上のほうからガチャンというものすごい音がしました。船が揺れました。

PG 23: The children ran up on deck. The fog had gone. It was windy.

“The crash must have been the sail,” said Biff. “It has caught the wind.”

“The boat’s turned around!” said Chip.

子どもたちはデッキまでかけ上がりました。霧は消えていました。風が強くなっていました。

「さっきの音はきっと帆がたてた音だわ」ビフが言いました。「風に当たったのよ」

「船が向きを変えたぞ！」チップが言いました。

PG 24: The boat started to move quickly.

“I’ll try to steer it,” said Biff.

“Good,” said Chip. “I’ll tie down the sail. Kipper, go to the front and look out.”

船はすいすい動きだしました。

「私が操縦してみるわ」ビフが言いました。

「よし」チップが言いました。「ぼくは帆を縛りつける。キッパーは舳先に行って注意して見てくれ」

PG 25: “Look out!” shouted Kipper. “Rocks!”

“Hold on!” shouted Biff.

She turned the wheel hard. Chip fell over, but the boat missed the rocks.

“That was close!” yelled Kipper.

「気をつけて！」キッパーが叫びました。「岩だ！」

「つかまって！」ビフが叫びました。

ビフはハンドルを力いっぱい回しました。チップは倒れましたが、船は岩をかわしました。

「危なかったね」キッパーが大声で言いました。

PG 26: The boat sailed on. Suddenly, Kipper saw a little rowing boat. In it were two men and a boy. They were waving.

“Help us!” they shouted. “We can’t row. We’ve only got one oar!”

船は進み続けました。突然、キッパーは小さな手漕ぎボートの存在に気づきました。そこには二人の男の人と、一人の男の子が乗っています。三人は手を振っています。

「助けてくれ！」三人は叫びました。「ボートがこげないんだ。オールが一本しかなくてね！」

PG 27: Chip pulled up the oar. He threw it to the men. They caught the oar. Then the men rowed to the boat and climbed on.

チップはオールを引き上げました。そして三人に向かって投げてやりました。三人はオールを受け取りました。そしてボートを漕ぎ、船にのぼってきました。

PG 28: “Who are you?” asked Biff.

“I’m Captain Turbot, this is Flounder, and the boy’s called Shrimp,” said the Captain. “This is our boat, The Barnacle.”

「あなた方はどなたですか？」ビフがたずねました。

「わしはターボット船長、こっちはフラウンダー。そしてその少年はシュリンプだ」船長は言いました。「これはわたたちの船、バーナクルだ」

(*編集部注:ここで固有名詞として使われている単語の元々の意味は、turbot はヒラメなどの扁平な魚、flounder はもがきながら進む(こと)、shrimp は小エビ、barnacle はフジツボ)

PG 29 “What happened to you?” asked Kipper. “We were about to eat,” said Flounder. “Shrimp was pulling up the last net when we struck a rock and he fell in.”

「何があったんですか？」キッパーがたずねました。

「我々は食事をしようとしていたところだった」フラウンダーが言いました。

「シュリンプは最後の網を引き上げていたんだが、船が岩にぶつかった

はずみで、海に落ちてしまったんだ」

PG 30: “We got in the boat to help him,” said the Captain, “but we only had one oar. We couldn’t row back.”

“Where did you find our oar?” asked Shrimp.

「シュリンプを助けようとボートに乗り込んだんだが」船長は言いました。

「オールが一本しかなくて、漕いで戻ってこることができなくてね」

「君たち、どこでオールを見つけたの？」シュリンプがたずねました。

PG 31: “It’s a mystery” said the Captain. “We always keep the oars in the rowing boat.”

Chip thought about the model. “It is a mystery,” he said.

Suddenly, the magic key began to glow.

「不思議だのう」船長が言いました。「いつもオールは手漕ぎボートの中に入れておくんだが」

チップは模型のことを考えました。「本当に不思議ですね」チップは言いました。

突然、マジックキーが光り始めました。

PG 32 The magic took them back to Biff’s room.

“Oh no!” said Kipper. “We left the oar.”

They look at the model boat. It had both its oars.

“It’s a mystery,” said Chip.

魔法の力が子どもたちをビフの部屋へ連れ戻しました。

「しまった！」キッパーが言いました。「オールを置いてきちゃった」

子どもたちは模型のボートを見ました。すると、オールは二本ともそこにありました。

「不思議だなあ」チップが言いました。

The Big Breakfast 「たっぷりの朝ごはん」

- PG 1: “Ding, ding! Ding, ding!”
Dad came into Chip’s room. He was ringing a bell. Chip sat up in bed.
“It’s time to get up,” said Dad. “Mum’s away and we have a lot of jobs to do.”
「カン、カン、カン」
お父さんがチップの部屋に入ってきました。ベルを鳴らしています。チップはベッドに起き上がりました。
「起きる時間だ」お父さんは言いました。「お母さんがいないから、山ほど仕事があるんだぞ」
- PG 2: Dad rang the bell on the stairs.
“Time to get up!” he called.
“Do we have to?” asked Biff. “It’s the weekend.”
お父さんは階段でベルを鳴らしました。
「起きる時間だ！」お父さんは叫びました。
「起きなくちゃだめ？」ビフはたずねました。「週末なのよ」
- PG 3: “Yes,” said Dad. “Mum gets back tonight. The house is a mess. We must tidy up.”
“I suppose so,” yawned Chip.
“Good. I’ll start breakfast,” said Dad.
「だめだよ」お父さんはいいました。「今夜お母さんが帰ってくる。なのに家の中はめっちゃくちゃだ。片付けておかなくちゃ」
「そうだね」チップがあくびをしながら言いました。
「よし。朝ごはんにしよう」お父さんは言いました。
- PG 4: The children came down for breakfast.
“Bad news.” Said Dad. “The milk has gone off, I’ve burned the toast and we’ve run out of juice. I’m sorry.”
“Oh no!” said Kipper. “I’m hungry!”

子どもたちは朝ごはんを食べに降りてきました。

「悪い知らせだ」お父さんは言いました。「牛乳が腐ってる。トーストはこがしちゃったし、ジュースは切らしてる。すまないな」

「えー、そんなあ！」キッパーが言いました。「おなかすいたよー」

PG 5: “We’ll have to go to the supermarket,” said Dad.

“We need some more food.”

“I’ve got a better idea,” said Chip.

“Let’s have breakfast in the café.”

「スーパーに行かなくちゃ」お父さんは言いました。「もう少し食べ物がある」

「もっといいこと思いついた」チップが言いました。

「カフェで朝ごはんを食べようよ」

PG 6: “You can eat what you like,” said Dad. “Then we’ll do the shopping.”

“Hooray!” said Kipper. “I’m going to have a big breakfast!”

「何でも好きなものを食べなさい」お父さんが言いました。「それから買い物に行こう」

「ばんざーい！」キッパーが言いました。

「たっぷり朝ごはんを食べる」

PG 7: “I’d like blueberry pancakes,” said Biff.

“I want eggs,” said Kipper.

“Why not have a kipper, Kipper?” said Chip.

“Only if you have chips, Chip!” said Kipper.

「ブルーベリーパンケーキを下さい」ビフが言いました。

「ぼくにはタマゴを」キッパーが言いました。

「*燻製の魚にしるよ。キッパー」チップが言いました。（*編集部注：イギリスでは燻製の魚を kipper という）

「チップが*フライドポテトにするんならね」キッパーが言いました。

（*編集部注：フライドポテトはイギリス英語では chips、アメリカ英語では French fries）

PG 8: At home, Dad told the children to start their jobs.

"I'll put the shopping away" he said. "You go and tidy your rooms. That big breakfast should give you lots of energy."

家に戻ると、お父さんは子どもたちに仕事を始めるように言いました。「私は買ってきたものを片付ける」お父さんは言いました。「お前たちは自分の部屋を片付けなさい。朝食をたっぷり食べたんだ。元気いっぱいだろ」

PG 9: The children looked at the mess.

"Let's tidy up later," said Chip. "I'm so full, I can't move!"

"No chance of a walk then," thought Floppy.

Just then, the magic key began to glow.

子どもたちは部屋のちらかり様を目にしました。

「片付けは後にしよう」チップは言いました。「おなかがいっぱいすぎて、動けないよ！」

「散歩には連れていってもらえそうにないな」フロッピーは思いました。

ちょうどその時、マジックキーが白く光り始めました。

PG 10: The magic took them back in time. It took them to a big house. It took them into a large hall with a big staircase.

"It's still dark outside," said Biff.

"Ding, ding!" A bell began to ring.

魔法の力が子どもたちを昔の時代につれていきました。一軒の大きな家へつれていきました。大きな階段のある大きなホールにつれていきました。

「まだ外は暗いわ」ビフが言いました。

「カン、カン！」ベルが鳴り始めました。

PG 11: Suddenly, a door opened. A little girl came in. She was holding a candle.

"I'm Rose. You must be the new servants. The housekeeper will see you now. Follow me," she said.

突然、ドアが開きました。そして小さな女の子が入ってきました。手にはろうそくを持っています。

「私はローズ。あなたたちは新しい使用人ね。*ハウスキーパーがあなたたちに会うわ。ついてきて」女の子は言いました。

(*編集部注...ハウスキーパーは、上流階級の家庭に置かれた最高位の女性使用人。家庭全体の管理をまかされ、他の使用人たちを束ねる)

PG 12: Rose took them down a corridor into a large storeroom. The housekeeper was waiting for them.

“You are late,” she said, sternly. “There are lots of jobs to be done.”

ローズは廊下を通って、子どもたちを大きな貯蔵室に連れて行きました。

ハウスキーパーは子どもたちを待っていました。

「遅いじゃないの」ハウスキーパーは厳しく言いました。

「やらなきゃいけない仕事は山ほどあるんだよ」

PG 13: She gave the children lists of jobs.

“Begin with the cleaning,” she said. “It has to be done before breakfast.

Ah! I see you have brought a dog. Good.”

ハウスキーパーは子どもたちに仕事のリストを渡しました。

「掃除からはじめてちょうだい」そう言いました。「朝食までには終わらせるのよ。おや！犬を連れてきたんだね。それはよかったわ」

PG 14: Rose took them to a large kitchen.

“This is Mrs Fry,” said Rose. “She’s the cook.”

“Hello,” said Mrs Fry. “I see you have brought a dog. Good.”

ローズは子どもたちを大きな厨房へつれて行きました。

「こちらはフライ夫人」ローズは言いました。「料理係よ」

「よろしく」フライ夫人は言いました。「犬を連れてきたのね。それはよかった」

PG 15: “Why is everyone pleased that we have brought a dog?” asked Chip.

Mrs Fry pointed at a wooden wheel.

“Put your dog in here,” she said.

“I may not like this” thought Floppy.

「どうして皆さんは、ぼくたちが犬を連れてきたことをそんなに喜んでいらっしゃるんですか？」チップはたずねました。

フライ夫人は木の車輪を指差しました。

「ここに犬をのせるんだ」夫人は言いました。
「なんだか嫌な予感」フロッピーは思いました。

- PG 16: Rose put Floppy inside the wheel.
“The wheel turns the meat over the fire,” said Rose. “It stops the meat burning.”
“You look like a giant hamster,” laughed Kipper.
ローズはフロッピーを車輪の中にのせました。
「その車輪で火の上のお肉を回転させるの」ローズが言いました。「お肉がこげないようにね」
「巨大なハムスターみたいだよ」キッパーは笑いました。
- PG 17: “Now we must hurry, there’s so much to do,” said Rose. “Lord Plum will be up soon. We must finish the jobs, then we can get his breakfast ready.”
「さあ、急がなくちゃ。やることは山ほどあるんだから」ローズは言いました。「プラム卿がもうすぐ起きていらっしやるわ。朝食の準備にとりかからなくちゃ」
- PG 18: Mrs Fry put the meat on the spit. “We need this for Lord Plum’s breakfast.”
She looked at Floppy.
“Keep walking and don’t stop!” she said.
“Funny way to get a walk,” thought Floppy.
フライ夫人は串に肉を刺しました。
「これはプラム卿の朝食にいるのさ」
それからフロッピーのほうを見ました。
「歩き続けるんだ。足を止めないで！」夫人は言いました。
「おかしな散歩の仕方だな」フロッピーは思いました。

- PG 19: “What else is for breakfast?” asked Biff.
“Kippers, oyster bread, beetroot pancakes, ale and ice-cream. Nothing too fancy,” said Rose. “I’ll get it ready. You get on with the jobs on the list.”
「他には朝食に何を出すの？」ビフがたずねました。
「燻製の魚に牡蠣のパン、ビートの根のパンケーキ、ビールにアイスクリーム。特別なものはないのよ」ローズが言いました。「ここは私が準備する。あなたたちはリストにある仕事をして」
- PG 20: Biff had to scrub the clothes clean. She beat the rugs.
ビフは洋服をごしごしきれいに洗わなくてはなりませんでした。
敷物をたたきました。
- PG 21: Then, she had to make some bread... ..and put powder on some wigs.
それからパンを作り、かつらに髪粉をふりかけなくてはなりませんでした。
- PG 22: Chip had to clean all the fireplaces. Then, he had to collect a lot of coal.
チップはすべての暖炉の掃除をしなくてはなりませんでした。
それから大量の石炭を集めなくてはなりませんでした。
- PG 23: Next, he had to polish the silver... ..and polish all the boots.
次に、銀食器を磨き、それに靴も全部磨かなくてはなりませんでした。
- PG 24: Kipper churned milk to make butter. He got ice cream from the icehouse.
キッパーは牛乳をかき回してバターを作り、氷貯蔵庫からアイスクリームを取ってきました。
- PG 25: He had to carry water to the bathrooms... ..and scrub all the floors.
浴室まで水を運び、そして家中の床を磨かなくてはなりませんでした。
- PG 26: “Come quickly,” said Rose. “The food is ready. We must take it to the dining room.”
“Hurry up and don’t forget Lord Plum’s newspaper,” said Mrs Fry.

「早く来て」ローズが言いました。「食事の用意ができたわ。食堂に運ばなくちゃ」

「急いどくれ。それからプラム卿の新聞を忘れるんじゃないよ」フライ夫人は言いました。

- PG 27: The children put out the dishes on a big table. "Hurry up," said the housekeeper. "Lord Plum will be down soon. He won't want to see you in here."

子どもたちは大きなテーブルに料理を置きました。

「早く」ハウスキーパーは言いました。「プラム卿がもうすぐ降りていらっしゃる。あの方はここでおまえたちの顔なんて見たくないんだ」

- PG 28: At last, breakfast was finished.

"Was Lord Plum happy with his breakfast?" asked kipper.

"No!" said the housekeeper. "You forgot to iron his newspaper!"

ようやく朝食は終わりました。

「プラム卿は朝食に満足されていましたか？」キッパーはたずねました。「とんでもない」ハウスキーパーが言いました。「おまえたち、新聞にアイロンをかけるのを忘れただろ」

- PG 29: "I'm worn out," said Kipper.

"I never want another walk," said Floppy.

"At least we can have a rest now," said Chip.

「もうくたくただよ」キッパーが言いました。

「これ以上の散歩なんてまっぴらだ」フロッピーが言いました。

「ともかく、やっと休憩できるね」チップが言いました。

- PG 30: "A rest?" said Rose. "We have to start getting ready for lunch!" Suddenly, the magic key began to glow. It was time to go home. "What a relief!" said Biff.

「休憩？」ローズが言いました。「昼食の準備を始めなくちゃならないのよ」

突然、マジックキーが白く光り始めました。家に帰る時間が来たのです。

「ああ、よかった！」ビフが言いました。

- PG 31: “That was hard work,” said Biff. Dad came into Biff’s room.
“Hurry up,” he said. “We’ve still got lots of jobs to do. Then we have to walk Floppy.”
“Oh no!” said everyone.
「大変な仕事だったわね」ビフが言いました。
お父さんがビフの部屋に入ってきました。
「急ぎなさい」お父さんは言いました。「まだまだ仕事は山ほどあるんだよ。その後フロッピーを散歩にも連れて行かなくちゃならないし」
「えー、そんなあ！」みんなが言いました。

- PG 32: Early next morning, the children made Mum a surprise breakfast.
“What a big breakfast!” said Mum. “You have gone to so much trouble.”
“It was nothing,” said Biff.
次の日の朝早く、子どもたちはお母さんに内緒で朝ごはんを作ってあげました。
「なんてたっぷりの朝ごはんなの！」お母さんは言いました。
「大変だったでしょう」
「どうってことなかったわ」ビフが言いました。